

松波むかし語り

ここに生き続けて

その24

今回のお客様

篠原旅館社長・商工振興会会長の

しのはら まさと

篠原 正人さん 58歳 2丁目

“肩書きはいっぱいですが、どれも合格点をあげられませんね”

一さまざまな顔をお持ちの篠原さん、多方面の課題をどう解決していきますか？



「大震災の3月11日は、翌日が千葉大の後期日程の受験日でしたので、受験生の宿泊を受けていました。交通手段がストップして、来れるのか来れないのか最後までわからなかったお一人を待って、結局翌朝3時ころまで起きて待ちました」。そうかかうと、旅館業という商売のたいへんさと同時に、篠原さんの人柄がわかったような気になりました。

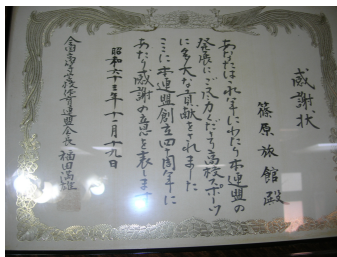
おばあさんが本町で営んでいた旅館が空襲で焼け出され、縁を頼っている市の市原市に疎開している時、昭和27年に生まれたのが篠原さんです。その翌年、お母さんが現在の地に旅館、篠原荘を始め、57年に社長を継ぎました。建物は何度か改築を繰り返して現在の鉄筋になりましたが、敷地のほうはJRの拡張で削られて少し縮みました。

篠原さんは、千葉高時代汗を流したバスケットボールの経験を生かして、いまでも母校でコーチを務めています。また、その経験からスポーツの合宿や遠征、研修関係が篠原旅館の客筋ともなりました。「何年か千葉市内の高校体育の先生方の集まりも引き受けていましたから、市内高校の体育の先生はたいてい一度は来ていた



松波本通り篠原旅館

だいているはずですよ」というほど、学校スポーツ関係では知られた旅館です。そのためお客は、春・夏・冬の休みと週末に集中します。「その時期は日本一忙しい」と言われる春休みの直前を襲った今回の大震災、「おかげで、いつもの年なら団体で埋まっているはずですが、今年はスポッと抜けてしまっ」と拍子抜けといった顔です。



嬉しいスポーツ関係感謝状

篠原さんは、千葉市旅館ホテル協会理事長、同県協会副理事長、そして松波商工振興会会長の顔も。商工振興会では、町内の各通りの名前を付けるとか、ホームページの立ち上げ、

『振興会だより』を発行して情報提供に努めるなど、篠原さんのアイデアをいくつも形にしてきました。でも、「千葉大と千葉商が地形を規定している松波は、商店街というまとまりをつくりにくい。加えて振興会は、小売り商店の集まりというより異業種集団で、何をするのが振興会の本来の役割なのか絞り切れません」とさまざまな課題が篠原さんの頭をかすめます。しかも今回の大震災、「振興会の仲間たちに聞くと、この計画停電で、食べ物屋は『店を閉めざるを得ない』、予約も入りにくい」という経営の落ち込みをどう回復させるか、篠原さんの手腕が期待されます。

